モンゴメリ著、村岡花子訳「アンの幸福―赤毛のアン・シリーズ 6 ―」新潮文庫、新潮社 2008 年 3 月 20 日刊を読む

アンの夢の家

１．フォア・ウインズでは万事がアヴォンリーのように落着いた、定まった、一律のものでなかった。風は変化があり、海は絶えず海辺の住人たちを呼んでいた。そのため海の呼び声に応(こた)えたことのない者でさえ血が湧(わ)き、落着かなさと、神秘と、呼び声に応えてみようかという可能性を感じるのだった。

２．「なぜ船乗りにならずにいられない人があるのか、やっとそのわけがわかったわ」と、アンが言った。「ときにより、あたしたちみんなに訪れるあこがれ――『夕日の果ての向こうまで航海したい』という気持が、自分の内に湧いたとなるとおさえられないものに違いないわ。ジム船長が引き寄せられて行ったのも無理ないわ。海峡から出て行く船や、砂州(さす)の上に舞(ま)い上がるかもめを見るたびに、あたしはあの船に乗っているのだったらいいなあとか、翼(つばさ)があったらいいのにと思うの。鳩(はと)のように『飛び去って安全なところへ行く』というのではなくて、かもめのようにさっと嵐(あらし)のまっただ中へ飛びこむのよ」

３．「君は僕と一緒(いっしょ)にここにいるんだ。僕から離れて嵐のまっただ中なんかへ飛び去らせはしないよ」と、ギルバートはものうげな調子で囁いた。

４．夕暮(ゆうぐれ)に近いころで、二人は赤い砂岩の段々にすわっていた。そのまわりは陸も海も空も荘厳(そうごん)な静けさに包まれていた。頭上をかもめが銀色に舞い上がって行った。水平線には淡紅色(うすべにいろ)の雲(くも)がレースのようにたなびいていた。静まりかえった空気の中に風と波のつぶやきが、吟遊詩人(ぎんゆうしじん)の歌のように織りこまれていた。

５．二人のすわっているところと港とのあいだにはもやに包まれた牧場が拡(ひろ)がり、薄(うす)むらさきのしおんの花がけむっていた。

６．「病人につきそってひと晩じゅう起きていなければならないお医者さまはあんまり冒険的な気分にはなれないわね」と、アンは寛大(かんだい)なところを見せた。「ゆうべ、ぐっすり眠っていらしったら、あなたもあたしのように勇ましく空想を馳(は)せめぐらすでしょうにね」

７．「ほんとうに僕はゆうべ貴重な仕事をしたんだよ、アン」と、ギルバートは静かに言った。「神の恵(めぐ)みによって、ひとりの人の生命を救ったんだ。僕が心からそう言えるのはこれが初めてなんだよ。今までの場合には手を貸したと言えるかもしれない。しかし、アン、もし僕がゆうべアロンビー家にとどまって死と接戦を交えなかったら、あの人は夜明け前に死んでいただろうよ。僕はこの

フォア・ウインズではまだ一度も試みられたことがないと思われる実験をやってみたのだ。病院以外のところではまだどこでも試みられたことがないと思うよ。この冬、キングスポートの病院で初めてやってみた方法なんだ。僕にしても絶対ほかにどうしようもないときまらなかったら思い切って試みはしなかっただろうよ。一か八かやってみたのだ――そうしたら成功したわけだ。その結果、善良な妻であり母親である人があとながい年月を幸福に、立派に役立って暮らして行けることになったのだよ。けさ、太陽が港の上にのぼる時、家へ馬車を走らせながら僕は自分がこの職業を選んだことを神に感謝したよ。僕は奮戦して勝ったのだ――考えてもごらん、アン――あの偉大なる破壊者である『死』と闘って勝ったのだからね。ずっと以前、みんなで人生においてなにをしたいか話し合った時、これこそ僕が夢に描いていたことだったのだよ。その僕の夢がけさ実現したわけさ」

８.「あなたの夢で実現したのはそれだけ？」

アンはギルバートの答の内容を承知しきっていたが、もう一度聞きたかったのである。

P81 ～ 84

［コメント］

モンゴメリ著、村岡花子訳「赤毛のアン」シリーズ第 6 巻は、アンと幼なじみの医師ギルバートとの初めての家での心暖まる生活。「自然と精神」という現代日本に最も必要とされるキーワードの意味を考えるよいテキスト。なぜ第 2 次世界大戦後の日本で赤毛のアン・シリーズが大ベストセラーになったのかがよくわかる。

― 2015 年 5 月 4 日　林　明夫記―